

# 「地域」を通して日本を学ぶ：長野オリンピックをテーマに

徳井厚子

## 1 はじめに

1998年は長野オリンピックの年であった。日本人はオリンピックをどう受けとめているだろうか。オリンピックは地域にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

筆者の所属する信州大学はオリンピックの開催される長野県に位置しており、地元に関心も大きい。しかし、オリンピックをめぐる様々な議論やニュースは断片的な形でしか入ってこず、ポジティブ、ネガティブな面も含め総体的に考える機会はあまりないように思われた。また、日本事情教育ではこれまで「日本とは」「日本人とは」といった観点からとりあげられることが多く、地域を通して日本を学んでいくという観点からはとりあげられることが少なかったように思われる。

筆者は多方向の視点から「地域」を通して日本を学んでいくことは重要ではないかと考える。そこで筆者は1997年度の留学生向け「日本事情・社会と人間」の授業の一部に、オリンピックをテーマに地域について考えるための授業を講義形式およびディベート形式でとり入れることにした。オリンピックという行事を様々な視点から考えることにより、身近な地域を通して多様な観点から日本について考える視点を養うことを目的としている。

本稿では日本事情の形態のひとつのありかたとして「長野オリンピック」をテーマにした日本事情の授業の実践及びオリンピックのボランティアをした留学生へのインタビュー報告をおこない、教育、体験を通じて留学生がどのように地域を通し日本を学んでいくのかについて考察する。なお、筆者は日本事情を次のようにとらえている。

「異文化接触など身近な出来事を出発点とし、人間の生き方（行動等）、考え方（価値観、信念など）、およびとりまく環境（社会システムなど）を通して、日本あるいは日本人とは何かについて考えること」（徳井1997）。

## 2 実践報告 オリンピックをテーマにした日本事情

### 2-1 授業の位置づけ・内容及び目的

今回実践報告を行うオリンピックをテーマにした授業は「日本事情・社会と人間」の一部でおこなったものである。本授業科目は日本語・日本事情科目のひとつであり、学部1年生を対象としたもので、前期、後期それぞれ週1コマ開講している。今回実践報告を行うオリンピックをテーマにした授業は前期の授業のうち、前半の5コマ（1コマ90分）でおこなった。

初回から第3回までは、スポーツ社会学教官、新聞記者、経済学教官に講義を依頼し、第4回および第5回は「長野でオリンピックを開くべきか」について2回のディベートをおこなった。(各回で立場を交替した)。なお、筆者(担当教官)は初回から第3回までは授業観察という形で参加し、第4回および5回はファシリテーターとして参加した。ディベートの前に講義形式の授業をいれたのは、様々な立場の意見やオリンピックに関する知識をインプットした上で、それらも参考にしてディベートを行うということもねらいとしているためである。また、オリンピックについて多様な視点からの講義がきけるよう、講義担当者は専門、立場、オリンピックについての見解の異なる方に依頼した。

授業の目的は以下の通りである。

- 1) オリンピックについての様々な意見や立場に触れることにより、多角的な観点から地域について考える力を養う。
- 2) 講義を通じて日本語の聴解力を養う。
- 3) ディベートを通じて口頭表現能力を養い、相手の立場を理解する。
- 4) 身近な地域を通して日本について学ぶ。

なお、受講生は以下の通りである。

韓国4、台湾4、中国10、サウジアラビア1、マレーシア5、ベトナム1、全25名

## 2-2 概要

授業の概要は次の通りである。

- |     |                       |           |
|-----|-----------------------|-----------|
| 第1回 | オリンピックと商業主義           | スポーツ社会学教官 |
| 第2回 | オリンピックと国際化            | 信濃毎日新聞社記者 |
| 第3回 | オリンピックと経済・経営          | 経済学教官     |
| 第4回 | ディベート：長野でオリンピックを開くべきか |           |
| 第5回 | 具体的な授業の内容は以下の通りである。   |           |

<講義>

### 1 (概要) オリンピックと商業主義

特にオリンピックのネガティブな側面に焦点をあてながら、IOCのありかた、長野オリンピックの招致運動等の事例を紹介した。IOCの委員のあり方、オリンピックにおける経済、政治、文化的なパワー等ビデオ「オリンピックを動かす人達」(オリンピックの貴族たち)を見ながら特に問題点について考えた。

### 2 (概要) オリンピックと国際化

外国人ジャーナリストという立場から、「オリンピックで長野は国際化するか?」という立場で話した。まず、日本とフランスの違いとして、フランスは人々に対しての壁が低いが、文化に対しての壁は厚い。これに対して日本は他の文化に対しての壁は低いのにに対して人々に対しての壁は厚い。日本人の特質として、相手に合わせる傾向がある。外国人を特別扱いするのではなく、自然体で接するのが大切ではないか、と提案した。

### 3 オリンピックと経済・経営

オリンピックのポジティブな面に焦点を当てながら、「オリンピックが経済に及ぼす効果」について特にスポンサーとなる食品産業に焦点をあて、話をした。オリンピックのスポンサーのしくみ（一業者につき一社）を特に経営という立場から説明し、具体的な資料および数値をもとに商業にどのような影響を及ぼすのかについて話した。

<ディベート>

#### 4, 5 長野にオリンピックは開催すべきか否か？

筆者はコミュニケーションを「相互に影響を及ぼし合いながら、お互いに意味を共有しあっていくプロセス」ととらえる。授業では、全員がコミュニケーションに参加できるように次のように行った。

まず、次のように役割を決めた。

- A 賛成派住民 4名
- B 反対派住民 4名
- C 環境保護団体（反対派） 4名
- D コカコーラ企業（賛成派） 4名
- E IOC 委員（ジャッジ） 5名
- F マスコミ（ディベートの様子を取材） 4名

具体的にはA, Dが賛成派, B, Cが反対派の立場に立ち, Eはジャッジを行い, Fは全体の様子を自由に動きながらビデオカメラなどで, 取材, その後新聞を発行するという役割をになった。マスコミの役割はコミュニケーションのプロセスをメタ的な視点から観察することである。

役割を決めた後, 次のような手順でおこなった。

- |                |     |
|----------------|-----|
| 1 作戦タイム (ABCD) | 15分 |
| 2 第一回ディベート     | 10分 |
| 3 IOC からの質問タイム | 5分  |
| 4 第二回作戦タイム     | 10分 |
| 5 第二回ディベート     | 10分 |
| 6 IOC の話し合い    | 10分 |

具体的には次のようにおこなった。

1と4の作戦タイムはABCDそれぞれのグループ別に行い, 作戦タイムの最中に各グループから1名ずつが他のグループのディスカッションに加わり, 自分のグループに報告するレポーターとした。レポーターは他のグループの作戦状況をききとり, すばやくまとめる能力を養うことも目的としている。

2のディベートは賛成派, 反対派のグループがそれぞれ意見を述べた。3のIOCの質問タイムはIOC委員がそれぞれのグループに自由に質問を行う。6のIOCの話し合いはFish bowl形式で行った。具体的にはIOC委員が教室の中心で話し合い, 残りの参加者はこれを周りで観察した。

## 2-3 考察

### <講義の感想より>

1) 先生は日本の国際に関していろいろな知識、考えを教えて下さった。先生の視点に対して納得できる部分とそうでない部分と両方であった。考えが異なる部分は大抵国が違って成長の背景もちがうのが原因ではないかと思って賛成できないけれど、理解できる。

確かに他の先進国に比べると日本の国際化は文化、技術の方がものすごく速やか、しかし外国に対しての考え方はちゃんと隔たりがあると思う。

文化、技術、運動、法律……どこの面から国際化のことを考えるとどれでも大切だ。しかし、文化・技術などの基本は「人」なので他の国の人々とふれあわないといくら国際化だとさげんでいても外人の私たちに足りないと思われる。

そういう訳で主体的に心から他の国の人々と接触しようという心が国際化の一番根本的・重要な事だと思う。(台湾)

2) フランスと日本文化と人々に対する見方には先生がおっしゃったようにフランス人にとって日本に不満というか日本に生活してあまり気がすまないこともあるのに同感した。

それは日本に永く住めば住むほど感じられる。特に外人に対する規則がいっぱいあるのはめんどくさくてたまらない。(略)さらに、日本人と結婚している外国人は日本の国籍がとりにくいと不満がでている。もう結婚したのになぜ配偶者の国籍になれないのか。一方、国際化をすすめたいとよびかけているくらい日本は何万人もの留学生をとりたいという希望があった。(中国)

3) (略) いったい本当の国際化とは何だろう。異国の人と真心をもってつきあうことだと思う。島国で住んでいる日本人は集団主義がとてもある。そのためよその人がなかなか受け入れられない。外国人にも心を開いて交流しあうこと。世界中どの国の人にも同等な待遇をすべきだ。国際化の本当の意味を理解した上で本当の国際化がすすんでいくのだと思う。(中国)

4) 幼い頃見たドキュメンタリーを見てあこがれた日本にきて生活している彼女はすばらしいと思います。彼女は日本で約10年ぐらゐの経験をしてきた中でいくつか私が今まで2年間生活してきた経験と同じような感じがしたことについて話したい。

第一は日本人とつきあう時はつきあえばつきあうほど難しい。

第二はよその人に対する警戒心。いずれも日本という国の特徴だと思います。自分がどんなに納豆が食べられる、話すのは日本語でも友達も日本人だけれども自分自身は日本人ではないのはものすごく大事なことと思います。

ただ日本という国だけではなくよその国にいても今日本で生活しているうちに感じられる外国人の気持ちはだいたい同じではないでしょうか。

私自身の考え方ではこう思います。日本人は日本人、外国人は外国人、そのことをすなおにあるものそのまま受け入れるんだったらもっと深いところまでいけるんじゃないかなと思います。私一人だけが感じてきたような気がしたところを同じように感じてきた人がいてほっとしました。(韓国)

5) オリンピックと自然破壊というテーマでもう一度よく考えてみるとどうしてオリンピックが開かれるのかという点を考えなければいけないと思う。以前から思っていたことだが、ある種目の世界一を決めるのにどうして国対国の競争になってしまったのだろうか。本来世界一を決めるのだったら全く国と関係ないはずで、参加したい人が全員参加できて、その中から世界一を決めればよいと思う。全員が同じ所に集まって協議するのは難しいだろうから、アジア地域とかアメリカ地域とか小さい地域の中で予選を行ってオリンピックの場で世界一を決めればよいのではないだろうか。今のオリンピックのは国対国という意識が強すぎる。(台湾)

6) 私はスポーツが好きでいろいろなスポーツに関心を持っている。だからこそスポーツの花であるオリンピックに関心をもっているのは当然である。こんな私が今年信州大学に入ってオリンピックを愛しているひとりとして参加できるということはとても嬉しいことだ。しかし、残念ながら昔のオリンピックとは意味が変わってしまった今のオリンピックに失望している。委員会はお金のためにオリンピックをつくっているし選手は優勝のために自分のからだを傷つける。どんな面からみても昔のオリンピックの精神は生きていない。(略)

来年開かれる長野冬季オリンピックもさいしょは少しの問題があったようだ。それもやはり人々が関心をもっていたからだと思う。今でも問題がないとはいえないが、長野オリンピックを成功させたいと思っている日本人、また私を含めて世界の人々の心は同じだと思う。(サウジアラビア)

7) オリンピックのことについての側面をよく知るようになった。オリンピックの背景は暗かったりきびしかったりして本当に単純ではないのです。例えば今オリンピックのスポンサーといえばコココーラです。今度開かれる長野オリンピックに参加する人々におやきをだそうというのはいいけれど、オリンピックスポンサーの反対でことわられたのは残念なことだと思う。オリンピックのもともとの意味がなくなって経済力をつけるためにオリンピックを開くのは大変残念なことだと思う。今の時代は、オリンピックが世界企業の商品になっている。(韓国)

1)から4)は外国人記者の講師による講義への感想である。一貫してよみとれるのは外国人としての共感であろう。10年間日本で仕事をしている講師の地域の国際化に対する考えは、2年程度しか日本に滞在していない学生にとっても共有できるものが少なくなかったのではないかといえる。4)は共感を安堵の気持ちでうけとめている。また、1)の台湾の学生のようにフランス人の講師の考えの相違点を国籍、背景の違いとしてうけとめつつ、「賛成できないけれど、理解できる」と理解への意欲を示した感想もみられる。5)ではオリンピックの講義を聴きながら「なぜオリンピックが開かれるのか」という意義を国際化と結びつけながら自分なりに問題意識を深め、考察している。6)7)では、オリンピックの様々な側面をを

自分なりの視点で分析しようとしている様子が見えてくる。

今回の授業の成果として次のことが考えられる。

まず、ディベートをいきなり行うのではなく、多角的な視点から知識・情報を十分与えた上で行うことの重要性が挙げられる。今回はディベートの前に多様なバックグラウンドをもつ専門家にそれぞれの立場からオリンピックについての講義をしていただくことができたが、これはオリンピックについて様々な立場から考えることのできた機会だったと思う。こうした講義は単に知識を得るためだけではなく、学習者が自分なりに考えを整理し、さらに問題意識を深めていくための機会を提供するのではないかと見える。こうしたプロセスを経てディベートを行ったことにより、さらに討論の内容が深まったのではないかと見える。

次に、講義形式ばかりではなく、討論を組み合わせたことにより、学習者がオリンピックをより身近な出来事として捉え、また主体性も高まったのではないかと見える。今回の討論は4つの立場から行い、またジャッジの他にマスコミという役割も入れる等試みた。それぞれの立場を通してオリンピックについて考えることができたのではないかと考える。

また、外国人講師による日本事情教育の意義も挙げられる。日本事情といえば日本語教師イコール日本人、とEという図式でとらえられがちであったと思うが、外国人の眼でみた日本事情の講義の場合、学習者と教師の「外国人としての日本での体験」という共通点の中から接点を見つけだしつつ、そこから新たな視点で日本をとらえていくという可能性も秘めているのではないかと考える。

### 3 オリピックのボランティアを通しての体験 —インタビューより—

では、実際にボランティアとしてオリンピックに参加した学生にとって「地域を通して日本を学ぶ」ことにどのような意味があったのだろうか。

留学生Aさん（台湾出身）は98年の長野オリンピックでボランティアとしてアルペンスキーインフォメーションセンターでボランティアに参加した。Aさんにとってボランティアの経験はどのようなものだっただろうか。以下にAさんへのインタビュー記録を載せる。（インタビューはオリンピックから2カ月後に行われたものである。）Iはインタビュアー、AはAさんを表す。

I ボランティアをしたきっかけは？

A 日本人の友人に誘われたのがきっかけ。

I 実際にはどのくらいの期間ボランティアをしたの？

A 10日間やりました。毎朝3時半頃家をでて、白馬につくのが朝の6時半でした。

I ボランティアをして、どうでしたか？

A 白馬のアルペンスキーは天気が悪くて何度も競技を延長しました。そのときのおこっているお客さんに対してにこにこ対応している日本人のボランティアの人はすごいと思いました。私にはそれがなかなかできなかった。それから地名がなかなか覚えられなくて案内もうまくできなかった。

I 楽しかったことは？

A ふだんの学校での生活だと限られた生活で単純な生活だけけれど、ボランティアをして社会人と接することができたこと。

I 日本人のイメージは変わった？

A 今まで日本人は保守的だと思っていたけれど、ボランティアをしてオープンな日本人にあえたと思う。ボランティアの人達はとてもオープンだった。それから、日本人は初対面で親しくなっていくスピードが遅いと思っていたけれど、ボランティアをしていたときは違っていた。最初は距離を感じたけれど、2、3日たって皆が私の呼び名を名字+さんから〜ちゃんに変えた。名前の呼び方が変わったら、壁がとれた感じがした。

他には、「日本人は感情を表さない」と思っていたけれど、全然変わった。清水が勝った時の人々の表情、天気が悪くて寒いのにそれでもやってくる観客の情熱……日本人ってお祭り好きなのかな。燃えている感じ。私だったらできないだろうと思います。「仕事にはあまり夢中にならず、感情をださず、動作とかよそよそしい」日本人のイメージが、「感情をだして、情熱的で、根性がある」日本人のイメージに変わりました。

Aさんにとってボランティアの経験は地域の人と直接接触する体験であった。ボランティアを通して様々な地域の人たちと接触することにより、Aさん自身がステレオタイプではなく、自分自身の眼で独自の日本人のイメージをつくりだしていく過程がうかがわれる。インタビューの中でこれまでの日本人のステレオタイプのイメージが崩れ、新たなイメージができていくプロセス、日本人と接触し、壁がとれていくプロセスがうかがわれる。Aさんの述べるように呼称は対人関係における親密度に影響を及ぼしているといえる。

#### 4 「地域」を通して日本を学ぶこととは？

では、地域を通して日本を学ぶこととは何だろうか。今回の授業のトピックは地元長野で開かれるオリンピックという地域性のあるものを選んだが、こうした地域をどのように受けとめているのか、という様々な視点にふれることにより、学習者自身が複合的かつ総体的な視点から、独自に「地域」をみる眼を養うことができたのではないかといえる。筆者は留学生が地域を通してどのように日本を学ぶことについて次のようにモデル化を試みた。

図にすると1～3のようになる。

まず、図1は学習者Aの周りに地域が取り囲んでいる図である。しかし、地域と学習者の間は接触していない。これは学習者が地域と接触しておらず、関心ももっていない状態であると考えられる。

図2は、他者の眼を通して地域について考えている図である。これは、一人の教官（B）から「オリンピックに対する見解」の講義をうけている際の状況を表す。ここでは、地域に対して一方向の視点しかもっていない状態である。

図3は、複数の教官の眼（B、C、D）を通して様々な立場から地域について考えている図を表す。複数の見解に触れることにより、地域について一方向だけでなく、多角的に考える視点が養われていることをしめす。しかし、ここではあくまで「他者の眼」を通して地域について考えている状況である。

## ＜留学生の地域接触モデル＞

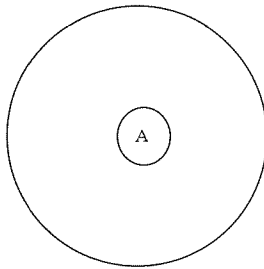


図 1

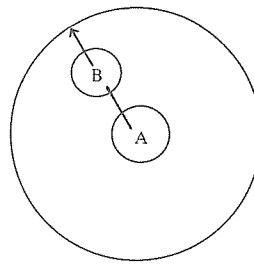


図 2

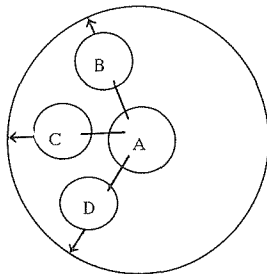


図 3

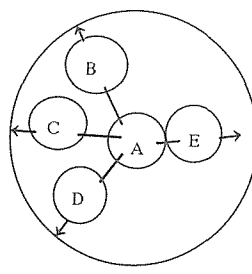


図 4

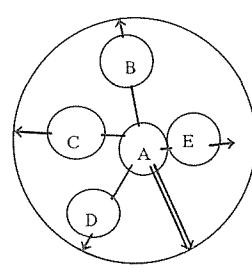


図 5

図 4 は、実際の日常生活の中での体験を通じ、直接地域の人々（E）と接触している状況を示す。図 2、3 では地域についての理解が認知的側面であったのに対し、4 では行動的な側面へと移っている。

図 5 は独自の視点で地域を通して日本人のイメージを創り出している状況を示す。この時点では自己の眼で日本を捉えている。

筆者は学習者が独自の視点で地域を通して日本人のイメージを創り出していく過程は重要ではないかと考える。そのイメージ形成のプロセスにおいては、多角的な視点、多様な側面からの知識、直接体験が重要な役割を果たしていると考えられる。

では、地域をテーマに取り扱う場合、教育という現場が果たす役割はどのようなものと考えられるだろうか。筆者は、学習者が独自の視点で地域を通し日本（人）について考えることができるよう、1)多様な視点からの観察力 2)多様な観点からの知識を与えることが重要ではないかと考える。すなわち学習者が地域の中で日本人と直接接触した際に自己の視点から独自のイメージが形成できるよう導く引き金のような役割を果たしているのではないかと考える。

## 5 ま と め

本稿では「長野オリンピック」という地域性のあるトピックをテーマに留学生にとって「地域」を通して日本を学ぶこととは何かについての考察を試みた。Aさんのインタビューからもわかるように、地域の人々との直接接触という体験は留学生にとってのイメージ形成に直接大きな影響を与えている。教育の場合、直接接触ではなく、間接的ではあるが、地域について多方面から考察するひとつのきっかけづくりという役割を与えるのではないかと考



える。すなわち、学生が独自の視点からイメージ形成ができる引き金となるような役割を果たしているといえる。

今回は地元で行われた長野オリンピックをテーマに「地域」を通して日本（人）を学ぶことについて考察した。今回の講義では多角的な視点から様々な方面の方にご講義いただいたが、さらに地域の人たちの視点からの講義，ディスカッションを入れるとより身近なものとしてとらえる事ができたのではないかと考える。この点については今後考えていきたい。

本稿をまとめるにあたり授業を担当していただいた先生には大変お世話になりました。

### 参考文献

徳井厚子1997 「文化モデルと日本事情教育」信州大学教育システム研究開発センター紀要2号  
(1998年4月30日 受理)